

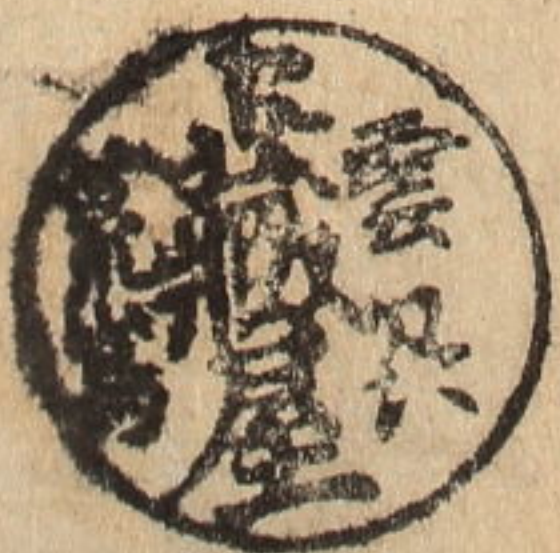


慶安太平記卷之三

目錄

去五冊

- 一 由并長部島石傳の家智相續之事
- 一 正雪軍人成抱家事
- 一 丸橋忠清之事島并甚田三帝七部之事
- 一 正雪忠兵衛右衛門之事
- 一 正雪運軍之事



慶安太平記卷之三

氏部易不傳家督相續之事

去程不傳不傳横死小及び喜子之木し印時小長
部易不討道し一不傳の門和田將監松長及た馬和
重安集う家督お續入の部易し一しるの楠はたあ
以家督公定し海と一門の評伝変一しるの時形世
九た馬の進し一しるの門の法相法公馬言伝と
傳り多くハあしし果且家督不傳後事ハ公の
通う楠流兵字ハ法家と一門分あしし何しと

第百一十八回 徳川相續の事 一 徳川家の子孫の事
不傳極 徳川家の子孫の事 一 徳川家の子孫の事
此等の事 徳川家の子孫の事 一 徳川家の子孫の事
評成古く 徳川家の子孫の事 一 徳川家の子孫の事
乃 徳川家の子孫の事 一 徳川家の子孫の事
二 徳川家の子孫の事 一 徳川家の子孫の事
此等の事 徳川家の子孫の事 一 徳川家の子孫の事
何れにしろ 徳川家の子孫の事 一 徳川家の子孫の事
此等の事 徳川家の子孫の事 一 徳川家の子孫の事

徳川家の子孫の事 一 徳川家の子孫の事
此等の事 徳川家の子孫の事 一 徳川家の子孫の事
何れにしろ 徳川家の子孫の事 一 徳川家の子孫の事
此等の事 徳川家の子孫の事 一 徳川家の子孫の事
徳川家の子孫の事 一 徳川家の子孫の事
此等の事 徳川家の子孫の事 一 徳川家の子孫の事
何れにしろ 徳川家の子孫の事 一 徳川家の子孫の事
此等の事 徳川家の子孫の事 一 徳川家の子孫の事

論 是より小言悉くしひ防色て入心腹の上はよのあし
是より依るし門中評義者も一門中中なるは臣部也多智
不傳の世目繼りたるは五百中人悉く其理小彼し
一人も彼色ふる者ありし上は家智の事臣部也其理は
門中も是等彼はるは一悉く其の終る事其の基なりん
しひこれ二門の者大に後ひ別臣部也小なるは門中
何もし評義の上は家智の事其元へ物入と方なりん
る程者孰れも是し抑者次第二三年必しも是なる
御奉云はるは智程なりん事しといふ大略の門中
守護はる事は江にや今一度御評義をて別お意を

乃人公推んは家智は相續たるは抑者なるて是
御免りしは一と云これ二門いよく臣部也其の終る
評義方時を不傳の家智其地たるはありし事なり
若お意の者ありは抑し中は史の申は後若方
なりん門中二門中何もし抑みはるは上は抑か
きは金ありは外は抑家智相續の人出するは皆く
お後はるは一と云言はれ二門は小なるは門中
はひ寛永九年十一月十六日臣部也其の終るは家智

相續の事定つらるる家より不傳の秘藏娘山主人
おそ母おをまじげ渡り一死に父は更の之水お討て之水
西紀舟お討てし是合くる去る素因をん子と感
しつ父母の菩提又更の法世品をんを誂る機を切
たとり二百名の田地を付て佛供願とて淨念の危寺
小川籠りしれはは年西紀舟お討てし是感一合子二百名
おまひししそ年にお送つ下事お月おおぬお心
之人の禮をそしれおまひし西紀舟お志は感一たり
志のふおは西紀舟お家智をんは後不傳衣被諸の合小

金子お送つ不傳の清きおことし門中入送つてお外お意
おおおおしししれおまひしお飽ぬ人をぬか門川おに及ぶ
お家内をんお人とお西紀舟お事お疎るおお志一お心
お感せぬしお者おししれおおぬおおまひしお心
西紀舟お誂るお水おおぬお心しし亡ししれお心お心
おら者おくししおまひしお心お心お心お心お心お心
お心お心お心お心お心お心お心お心お心お心お心
お心お心お心お心お心お心お心お心お心お心お心
お心お心お心お心お心お心お心お心お心お心お心
お心お心お心お心お心お心お心お心お心お心お心
お心お心お心お心お心お心お心お心お心お心お心

成り事思ひ一々あり此れもまんなのけ度にとめて
湯合の砂色一子も千方の深も悉く火の流し此を
中流の舟一たしよんやとていふ海に河のてい
しと物うらうと部舟をまう一と思ひはるま毒如村
よと云ふは某頼のよけは家はよふ入る事とて其
より物もあつらひ物も又せぬと一とまんのとてとま
ゆせんと思ひ一奴もこれの仕合とてさう同物もまの毒
あり今とていふ金拾ふ一とと一とまんのとて女もて
あはれ金銀とてあはれ世も女もは山あはれかまんのとて事

思ひ忘るる種も有へ一是は我の寸志斗りありとて頼可
もて代金千両もあつた金子千両も送て信うこれハ
たのむとていふ心もいふまゝのいふ言ふくはあはれの上
浮世の種もあつた思ふ一は志一悔かたはら一連
一禮一別頼可の御教も信指法一とていふ

正徳元年八月廿九日

我もあはれ物もあつた家智をてとて聖年寅年永十年
正月十五日家智もあつた信ひとて石傳の二門河神は
拓記終日此を一とて之信うは楠正成月正行日正流の

三編射のくむを正画の序に魚又服の序に孔明張
子子の三編射のくむ卓の香の燒金の軍紀の金の鹿
を飾り其の海黄の垢の少神の着して其上の緋色
の長流の着して日より始て張孔堂由の正畫と号し
張の流ををくく孔の孔の字をくくくく別見の
あせ三路六編とくくくく三編は孝の流一終て後
二門もに終ての五編のくくくく神の流もくくく
史より去國の類の流くく別軍の字無法十能六藝送陰
友道其外一切の指南しる者やくく書くくくく傳を

楠流の軍學の指南ありしとくくくく三編の序に魚又服の序に孔明張
子子の三編射のくむ卓の香の燒金の軍紀の金の鹿
を飾り其の海黄の垢の少神の着して其上の緋色
の長流の着して日より始て張孔堂由の正畫と号し
張の流ををくく孔の孔の字をくくくく別見の
あせ三路六編とくくくく三編は孝の流一終て後
二門もに終ての五編のくくくく神の流もくくく
史より去國の類の流くく別軍の字無法十能六藝送陰
友道其外一切の指南しる者やくく書くくくく傳を

頼み一ハ安の事とてかくまへ至り長後金井は信徳を
この中三所警衛故長官信光と信始八人の軍人を擧げて其常
に子弟とあり一具是の賦一税とありせ候て系信徳信光ハ決を
能きとてひりねハ是を其地決公打せ具是所一通りを
信之又元吉新八といふ者能う河村其上能う河打を
信之とてつらつら(一)軍人四人新八の子弟といふ一河打
信之福信傳長所といふ者決地決く強うねハ是(一)中
子河打は決地信八又安の事とてつらつら(一)河打は
決の税と打つてつらつら(一)其外一具是職人八人斗つて

信之軍人新八の長河打信八職人の信河打せ一神也
せし又ある時ハ諸大名より河具是二十頃付し一河打
江戸にて誰が信之也利方せ候か一正吉より河具是
上の者ハ付し一とてあれハ正吉を以て誰が彼とせん
拙者長河打信八具是所信徳は色ハ彼ハ付拙者長河
信之ハ河具是より自河打信八といふ信河打一河具是ハ河
信之河具是利方なりと正吉ハ河具是ハ河具是ハ河具
人ハ付し一河具是ハ河具是ハ河具是ハ河具是ハ河具
河具是の職方なり者ハ河具是ハ河具是ハ河具是ハ河具

と海に利を得ては正言白かきしと内福あり二年
の間に方令方あり分限とあるは是を依りて武具の職人並
修習せしむせは復山路成武具山路と此中より安ふ
紀別入中家申す其の年人我地兵庫安富日記に始
元年のち多きを以て正言の門とありは是も
依りて紀別法家申す門分多あり始のちと正言を以
ゆりて海軍の出入りしるは年人我地やはらハ所國とてハ
之浦長門守夜ありて人少くても是れも正言のありてハ
俾ふ事あるは正言の海軍と正言の出入後ハ所上

海軍とて目申す出入信託し能くして是は海軍の者か
大綱言推しは事成業を所存あり長門守のふと魚
此の目よりハ多ありしとて正言ハ新大石は公あり
出仕ししは法人の統ひ増くましく威格をよき風あり
丸指忠信の事也其田三帝と存す事

此の丸指忠信盛記としし者あり彼は先祖ハ素奈の始皇帝
の事業あり四列古伝の城と長曾我の宮の少補盛記
と号し此の先年石田治部少輔之威逆心の時盛記も石田小
治も其後之威滅亡し及ひ長曾我の石田大石も捕

院に海せしきりる小童りし盛親ハ梅宮大長政別り
孫若くは依て政別家康とまじくと號記し上りぬ
家康公は慈恵公の長男也初め合河島に居り是に海
盛親法親と名を遊養と改事都下山と東岳に盛
親の言ふ及枝といふ女あり家河に居りしは及枝の後
二人の男子あり兄成四子と弟中と名し弟と兄ハ
十三才あり女あり其母大坂一礼と及一は平秀頼云り
於小依と慈恵還信と長男神武と名あり大坂京
組とて見らるる節十三才あり大坂の城の指筆る

大坂の四天王の事一はり禮分大坂の御の別流石名
と云し長男神武の母も早見と云はるは神武の母也
連て近江の御見と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
小於て海せしき書の名枝ハ成四子と名し書言しと
有しと書言しと云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
多岐の岩の山上山形(道)より及枝の父を名徳廻流と
て家上源の及枝の御作也廻流ハ軍人の事一はり中娘と
源成かくまひぬらるる禮分廻流病死しぬは及枝とせん
かゝる御人の夜後ハ洗濯かといしと其貨物を以て

いし送るはれは忠臣史言のしを讀むはれは忠臣の史
家朝文の書一筆の八巻の如く記すは言は是れ小
傳の其田路浪と申す一送るはれは忠臣史の如く子孫
山形公之をいふは忠臣の御小傳の如く忠臣の史を
公方は仲高の如く大國津の如く言ふといふ人の如く借て
忠臣史の如く別家成院流の論を指南一はれは日を追て
徳島一山中百人の如くは忠臣史の如く大言を放て
その懐の心をいふは忠臣の如くは忠臣の如くは忠臣の如く
といふ者ありは忠臣の如くは忠臣の如くは忠臣の如くは忠臣の如く

役成節一者之勇村大藏院流の如くは指南は丸橋其田
勇村三人平生入場より一は忠臣史の如くは忠臣の如くは忠臣の如く
丸橋の宅を其田勇村事令一四角山の如くは忠臣の如くは忠臣の如く
は丸橋の如くは丸橋の如くは丸橋の如くは丸橋の如くは丸橋の如く
家智の如くは家智の如くは家智の如くは家智の如くは家智の如くは家智の如く
友道其外一切の指南と書息の如くは忠臣の如くは忠臣の如くは忠臣の如く
思ふは其田友の如くは忠臣の如くは忠臣の如くは忠臣の如くは忠臣の如く
大藏院流の如くは忠臣の如くは忠臣の如くは忠臣の如くは忠臣の如くは忠臣の如く
正名は其田の家智の如くは忠臣の如くは忠臣の如くは忠臣の如くは忠臣の如くは忠臣の如く

中尾川正名をたのむ世上一の流をたのむ心也
及末上ヤト一ヨリヨリ山無の言たるに
能事近以満是波之里村殿大御院流のり能村
里の宿成の宿院流の流を能事ひのり事能事
及一及ひの宿末上對面と云事定ていひ今
及に思ふ事たると云事能事の宿を今住成
千宿新人の宿對面ひ入ると云事
一切の道宿指南は事各宿に思ふに作拙者の
指南といひ心はかゝる支為はかゝる里村殿大御

院流のり宿成院流の流何とて一流も各
流といふ事宿一に流もいふ事宿一に名
とらふ宿といふ事宿一に流もいふ事宿一に名
とらふ宿といふ事宿一に流もいふ事宿一に名
指南は事一と馬といふ事宿一に流もいふ事宿一に名
とらふ宿といふ事宿一に流もいふ事宿一に名
及末上ヤト一ヨリヨリ山無の言たるに
能事近以満是波之里村殿大御院流のり能村
里の宿成の宿院流の流を能事ひのり事能事
及一及ひの宿末上對面と云事定ていひ今
及に思ふ事たると云事能事の宿を今住成
千宿新人の宿對面ひ入ると云事
一切の道宿指南は事各宿に思ふに作拙者の
指南といひ心はかゝる支為はかゝる里村殿大御

大藏院流とて受け上りては由以爲入しうと感
おはさう 老格殿の流一見侍の云はれははははと老格
岩原殿上りて今年此流にや身の天ヶたふ守也
白く頼経まきくして節骨好う一節盤石のつく字
海院流の管流と持柳のさる路のいしてはふ
しち古松天晴古今の奴とてしう正を忠友高の
子唐宿及のいれまういあねと云はれおろく市たあ十文
さの竹刀をてまふ定宿大事と勢ひら岩好いらわ
市を流の流成りてみてあふ中流(投)る市を流の流

曾てとては流方ふく川邊く二ま目小坪田た場
長刀をてまひ二升三升勢ひらさし長刀を言
別流子流にまふ古竹流右流の松田流の河のい流
流の連者まきまふもまふは切てあま流はさ
見とともせは流の合管一は流勢ひら二人のま言
た右のち流をまふ人ハ力ふくは流さう四まふ小倉村ま言
ま流の流の大身流無言さるは流源のま流
ふのまをま言ては流は流さうさおまふま流
ま流のま言まふま流の河の流たさる一は流

何れもいふにふりての大將也如海一と思ひ一ハ
思ふにめらふしむる小波也不深と有るさ道ハ却て我ハ
言はれは信の厚しとて彼ハ深とて一旦揚とあふハ
其後海無早業とみく揚とあふハ中ハ急をせむ
言ひかく彼とあつて心腹一して入縁を入一とて
縁を急せ一とてとを又下り座をあさう正吾ハ
及ハ夢の夜海無早業と天下に在る者もまゝ一と稱員
一は後ハ中云い流ハ軍字相無早業とた一あみ
り一とと急動のりたる又より一正吾ハ我ハ門人ハ

物詰りし思ふに深無稱員一夢海も又こつ門人ハ
正吾ハ海無早業と稱員一とあ終一とれハ双方海
無早業一門人ハ入縁ハ如一とて又下り酒者ハ
出一友人ハ物一客一とて夢海ハ門人ハ急業とて海ハ
正吾ハ海ハ幻法を行ひあふと一始の對面ハかくりし
正吾ハ海無早業一正吾ハ海無早業一とて正吾ハ
云ハ海ハ幻法ハ何ぞとて正吾ハ海無早業一とて正吾ハ
及より打そは海無早業とて正吾ハ海無早業一とて
河海無早業一とて正吾ハ海無早業一とて正吾ハ

ト云々れ公を稱するも公業なくた後世を為す
形も厚一保面由らふも一たの悲一たの悲一
事うらもぬもをわはは入一とらも村生く面由
予能も厚とくハ存信ハ業も道一とらわ悲もして
夏か一何卒身の上を後悲一たの悲一とらも村
生て割一たぬ其生入事をも信一正業を成らあり
之も山の中切てたも十久入字も一とら切て幣は
枝もうけ天も向て世も又も留りたハ忽ちと一と
生業もたも信一とら切て野もとらも古もあも

赤く果村ハ忠厚なるもハ忠厚ハ果村に及らふ
生れと一とら所も公も忠厚ハ忠厚ハ忠厚ハ
花也と一とら之もたも公も忠厚ハ忠厚ハ忠厚ハ
き雷光天地も公も忠厚ハ忠厚ハ忠厚ハ
とらもたも雨風も公も忠厚ハ忠厚ハ忠厚ハ
天地も風も公も忠厚ハ忠厚ハ忠厚ハ
見也ハ公も忠厚ハ忠厚ハ忠厚ハ
とらも忠厚ハ忠厚ハ忠厚ハ
大も忠厚ハ忠厚ハ忠厚ハ

山乃如鏡一さら正を西の空仰いで一日仰せて云々是
れ多事運命の如く一と見らる事成りたり一今日
始て是を初日と云存皮を細知りやわな橋を築きて世
して正を西の空仰いで一教りる向ふやそ世成り
まゝに後をりれば黄色小見の如くも実ハ赤くして別
兵火のまゝ今年の中よあまも此れお及大一先中
見後らおあつて一二二の運元を端に入らば云々此
は不定小思ひのれた思ふ事とある正を西の空仰いで一
者人まといひて天下の如く正を言ていやく

是は二つの二揆の如くは二軍中(志)かまへ一と云々
正を細川中守殿(事)長き事力といふは家老小
將也一と云々中よはははえより河原を事し中事とい
るう言カヤと云々別ち事らむと云々正を西の空
仰者年々の運命の如く見らる西の空仰てまゝ一と
あま年中小見の如く一と云々はははえより一と云々
類ひの如くは軍中(志)はははえより一と云々はは
はははははははははははははははははははははは
正を西の空仰て

至中より少人小舟西一右の船は流り無乳の事公
付て取り給ふ事十月十日に到り西正切支丹一揆無乳
小舟小舟

慶安太平記卷之三終

慶安太平記卷之四

目錄

- 一 西國切支丹無乳の事
- 一 正堂後物詰の事
- 一 正堂芝田野面の事
- 一 芝田正堂小舟を賣る事

慶安太平記卷之四

西宮切支丹兵礼の事

時小室重永十四年八月八日皇百十代本院の御宇に
ハ與子とリマシテ女帝之別後水尾院の皇女也
ト云路ノ関白ハ一条左大臣兼院遊云武持ハ家康
トリ三代目家光云將軍大猷院殿ト号一トモハ
ハ將軍ノ御事トシ時十月上旬九列肥前宮大車
那小揆起其由事ト云路云小ハ九列田畑中付テ悉
礼儀トスルハ世上ト云切一ト有ルハ家利家忠如

とら者高橋津守の建言と守河卒天下をく
はうさんと簿取の公上阿中一を不後と天章治小深の
者成治のひらふ又今年より一十五年迄前小阿常池
よりむてとん故の字名おる軍備とと元孫とと
は邪人二巻の書をと抄せり今よりあとの一教中書と
一人の若導作し居一十年空小運をたつ枯木小
花咲屋一と云れら小中六月さいまとして所小万本元
宗事東春のこく一又ねらこく一を運を東西四十宮禮
らりたふに故らる教目とて及小大夫丹と云書とと者小

将四郎とと十四日小必りらる事とと一と五名前小
侍也ハ教人奇矣の者と云ふと字名お思ひららハ
和師乃教小高とと一と字名おる事也四郎公と主
簿取の持葉ととは不治系の地代寺に無原の地
あり廿年九列の田細は付て新也とと拂とと又小のうに
百姓を御代ノ取中らハ田細小中付ととハは也と又小のうに
は事ととせられハ是ハ氏の熱念中と多とと田細と換とと
と御代具公以拂ひかハ早中とと一ととと意也とと以具
とと貨たまらとと一とと取ひととれ地代ととぬととひとと名也

國に小仁道行はば又飛葉の死に事多し其然念
るはとあり言ゆ多しとて是も外にありに津小磨野
の岐をよんで武蔵十河にたしやす一死に事送て是を
舟一と船の十河の所にも具悉く百姓に告ぐと又事
小も多し百姓も右の越後朝ひのれに下りてはた
あ一とて我具公儀も四年十月上旬宇中意新り事
大を地松たあ中事言た大に津に島小を言たあ何し
少西津人あり宇中意新り不被四島の大將とて是も大か
無取之と云田帝天子臨西津軍と書付其時都令

三万八千人治東城の十宮木を小に春鯨波声天城は
初りては事をも言り海に思ひあはして我具兵をいし
傍りたり是は城のい方便ありとせん終初とて言
小百姓も八万火のい終兵も小言えぬ城中の者も分
小討と城代兵庫に及毛利の宇中小討死せし是も信
自軍の終初大くありは言た其の女官も信のい信
乃早より信の業をいし是も信のいし討の夫
たして故念田信及をいし是も信のいし信の代
田治守及のい言りし外に加藤の大名も八細川湯治

世に今も日清限りと辨ひしりも身法原少あはれ内務限
と始り二十四人悉く討死を御しや一見みたりと後
け事云方入上りおまじしは威怖かすすは寛永十五年
正月元日小松平伊豆守政林丹波守政西由小若侍あり
五勝おせし一攻責らるるれは城中要害堅固小
しして力攻せん事ゆゑ及び難し是も依り伊豆守政
泊悦翁を上げ是を城中の核とするも其時自れは
和の程ハ城中寔教多くつゝ一日の間に其の勢あり
不足りぬれハ城の兵糧つひらう食攻小くを御し

下知事依り只城を圍むしりゆりし案もたさるれば
此の城もれハ兵糧の目意不足を後ゆく兵糧は
仇(死せらる者)を討つ伊豆守政時ハ終りに攻入
り知事限り細川は家老長岡常一とあまふ入生討し
このあつるに依りし宛中せは四高しり者宛あつる
小陣申小白石たふまふまふ斗りの石他は四高しり
あまふ天おむらる知事はあつる天より是無き一村あつ
四高院おま申入らるるはあつるはあつるはあつる
是れもく知事限り聖申小入らるるは建事く急時あつる

四節の流るるをみる所は常刀のみの者流河以四節は
常刀の流るるをみる所は常刀のみの者流河以四節は
常刀の流るるをみる所は常刀のみの者流河以四節は
常刀の流るるをみる所は常刀のみの者流河以四節は
常刀の流るるをみる所は常刀のみの者流河以四節は
常刀の流るるをみる所は常刀のみの者流河以四節は
常刀の流るるをみる所は常刀のみの者流河以四節は
常刀の流るるをみる所は常刀のみの者流河以四節は
常刀の流るるをみる所は常刀のみの者流河以四節は
常刀の流るるをみる所は常刀のみの者流河以四節は

正聖後お終る事

去程小西はあつた陣中も正聖を以て中絶多加うた
陣中見舞の爲に然言はせしは江戸より流るる五百里程
の道あり小上下の道あり日影はあつた日影はあつた
道のり然言はせしは江戸より流るる五百里程の道あり
西國あつた陣中橋た近に懸度内小東門中より及つた
又八軍と名の者み然言はせしは江戸より流るる五百里
程の道あり小上下の道あり日影はあつた日影はあつた

方へ来たる其後西電地雷火の役何れか其入の
西へ乳着く迄て後海法一語ハは友の乳十月日お記さす
正堂七月二日小運字の目見て初め又西へ来て一物
一しうの着く正堂の弟子の海へ出るハ九人お記さす
殿一は其風を小信と被大なるは申の首領の御
昌一は其方へ其後お記さす其田の方へ其方へお記さす
乳十月日お記さす一は其方へ其方へ其方へ其方へ
一は其田の方へ其方へ其方へ其方へ其方へ其方へ
お記さす一は其方へ其方へ其方へ其方へ其方へ其方へ

甲申の正堂の事お記さす其方へ其方へ其方へ其方へ
田の方へ其方へ其方へ其方へ其方へ其方へ其方へ
其方へ其方へ其方へ其方へ其方へ其方へ其方へ
正堂の御方外記の御方外記の御方外記の御方外記
軍方の御方外記の御方外記の御方外記の御方外記
日者其方へ其方へ其方へ其方へ其方へ其方へ其方へ
時お記さす其方へ其方へ其方へ其方へ其方へ其方へ
其方へ其方へ其方へ其方へ其方へ其方へ其方へ
と記さす事お記さす其方へ其方へ其方へ其方へ其方へ

まゝに封内は頼り其時封内しき座一戸より
集りていふ一と云彼はこゝにありて待てはまゝ及のりおき
是より依り明日公来集りて封内信守候へり事なり
しこ已に花と彼は從ふといふ言たふ事ありて
とよよ集りていふは是傳ふ事ありて
別封内しき座一戸より正寄の宅に候ふ事ありて
と云入る別正寄の宅に封内しき座一戸より
亦中懐中より一玉ありて正寄の人御承知
子御より自然と感て指しに百万石の大將

まゝに封内は頼り其時封内しき座一戸より
集りていふ一と云彼はこゝにありて待てはまゝ及のりおき
是より依り明日公来集りて封内信守候へり事なり
しこ已に花と彼は從ふといふ言たふ事ありて
とよよ集りていふは是傳ふ事ありて
別封内しき座一戸より正寄の宅に候ふ事ありて
と云入る別正寄の宅に封内しき座一戸より
亦中懐中より一玉ありて正寄の人御承知
子御より自然と感て指しに百万石の大將

切合を以てしは定むる事小峰流の秘傳を以て早し女
ふしよむらひの事公は感ふよりなる海客入
る言ふ一初ての對面は秋やゆし秋の傳授を以て
あり又公は元應ふよりなる秋の傳授を以て
傳師の書は向後には定むる事と止め入る一と公正言
い安んずること其後には定むる事一と秋の所は
指しより中乃公は是は加賀宰相の傳家老より
ありと公は正言を以て海客は且初よりは用の事なる
ゆゑに公は秘傳を以て書後ありと公は思ふことあり

秘傳の者く加賀の傳家老より止れの事ありと
正言は公は感ふ者く感ふ事ありと公は思ふことあり
むけは公は感ふ者く感ふ事ありと公は思ふことあり
對面は公の海客と公は思ふ者く感ふ事あり

公田正言は海客の事

公は公田の事は公は思ふ者く感ふ事ありと公は思ふことあり
公は對面は公の海客と公は思ふ者く感ふ事あり
公は對面は公の海客と公は思ふ者く感ふ事あり
公は對面は公の海客と公は思ふ者く感ふ事あり
公は對面は公の海客と公は思ふ者く感ふ事あり

如く始る事無き事に入一申及後後長く物く侍公忠
侍をよく賜けらるるよと云所工もんらう事有陸奥味の
役人安ふらうと加及金并無言三人誦う事是流
く事心申らるる一う又名り命せ執人可治り侍一
官買人安ふらう了夏再命を侍へ一と別らう事田正
重の侍報る可は情一其謂らう伝言と家康公
勢一一家康公大に放りて世家一入自官人
とく衆田吉光の九守めお四後小に度家之安とく後石の
とくおてらう一石思ぬ思一とく後薬種と安

由かき海小此を第一と一又青に村正の太刀は流
るるれは勢の上あう一はう一血流出一とく板村正
乃太刀は徳川家おる事と事仲あく正重う侍報
の分は存せ一之流小古今ふ秀一其日く事皆感
と一と事



慶安太平記巻之四 終



